

チャールズ・ズゥエブリンと シカゴ・レクリエーション運動の萌芽 —社会改良から総合都市計画へ—

川口 晋一*

小論は、シカゴ・レクリエーション運動の萌芽に関する研究である。いわゆる1890年代からの合衆国における“Progressive Era”において、また特にシカゴ市においては大量運動と政策決定などの背景が極めて複雑で、公的な空間がどの様に作られたのかまだ十分に解明されていない。それ故に、社会改良運動の中心にあり、プレイグラウンドを対象にした研究も行っていたチャールズ・ズゥエブリンの活動に注目してその様態を描き出そうと試みた。まず、ズゥエブリンはシカゴ学派社会学において等閑視された存在でもあり、散在した資料を基に日本におけるズゥエブリン、西欧研究者によるズゥエブリン評価のレビューを行い、再評価を試みた。また、彼が関わったハル－ハウス、ノースウェスタン大学セトルメント、シカゴ大学セトルメントなど改良活動の実際とレクリエーション運動における意味をシカゴ市の地理的・空間的な条件も含めて検討した。そして、*AJS* 論文「シカゴにおける市営プレイグラウンド」(1898年)、『アメリカ都市の進歩』(1902年)と『公共空間発展の10年』(1905年)など、彼の著作の分析を試みた。結果、ある程度ズゥエブリンがシカゴ大学を辞任に追い込まれる少し前までの活動を、一つの流れの中で捉えることが出来た。そして、ズゥエブリンの研究活動とその再評価から、レクリエーションを中心とする公共空間創造過程の一端に触れることができたと言えるだろう。

キーワード：ズゥエブリン、セトルメント、レクリエーション、初期シカゴ学派、社会改良、総合都市計画

はじめに

小論は、シカゴ市において展開されたレクリエーション運動について、その源流を探り萌芽の様態の一端を示していこうとするものである。その際に、シカゴ大学に籍を置きながら社

会改良運動の中心にあったチャールズ・ズゥエブリン Charles Zueblin の研究活動に注目していく。

合衆国におけるレクリエーション運動¹⁾、それは広く都市住民の余暇関連の施設やプログラムの発展をもたらし、19世紀末に中西部の都市シカゴにおいて花開き、大きくまた急激に発展を遂げた。本稿は、そのシカゴ・レクリエーション運動の萌芽を改革・改良主義者、そのリー

* 立命館大学産業社会学部准教授

ダーを中心に描き出そうとする試みである。

合衆国における“Progressive Era”²⁾においては、大衆運動と政策決定の背景が極めて複雑な様相を呈していた。更にシカゴという都市では大衆運動が合衆国のどこよりも激しさをもっており、活発な改良運動を伴いながら都市の形が出来つつあった。それは、資本主義の矛盾すなわち移民の労働問題と貧困が際だっていたからに他ならず、1920年代以降はそれに対応した学問研究も定着するようになった。しかし、1890年代からの20年程の期間については、大衆運動や改良組織の複雑な動きを十分に捉えることが出来ず、多くの領域で研究が深まっていなのが現状であろう。レクリエーション社会史研究における1890年代、シカゴ・レクリエーション運動の萌芽についても十分解明されていないのが実際の所である。

1892年に開設されたシカゴ大学社会学部の教員人事³⁾がこのような時代背景・社会状況を基に行われ、研究活動が社会改良や実践・応用という特徴を持って開始されたことはよく知られることである。また、シカゴ市というフィールドが都市問題の把握と都市研究の方向性を決定したことも周知の事実である。シカゴ学派社会学は1920年代以降の第2世代と第3世代にその全盛期を迎えるが、シカゴ・レクリエーション運動の萌芽期に当たる19世紀後半から20世紀初頭にかけて在籍した第1世代は、学問の展開・発展の過程で政治・宗教的なレッテルを貼られ、学問的に低い評価を与えられ、意図的に排除された者もいた⁴⁾。その中の一人がプレイグラウンド研究に力を入れていたズウエブリンである。彼を辞職に追い込み、その後現在に至るまで、彼に対する正当な評価が行われてこなかったことが、シカゴ・レクリエーション運動研

究、特に1890年代の萌芽期研究が深化しなかった原因の一つであろう。ズウエブリンに対する理解と再評価が“Progressive Era”という時代とレクリエーション運動の萌芽研究にとって重要であると考えられる。

そもそもズウエブリンはジェーン・アダムズ Jane Addams と彼女のセツルメントであるハル・ハウス Hull-House に多大な影響を受け、問題意識やアプローチの面でも負うところが大きい。ズウエブリンに光を当てることとは、すなわち改めて彼の関与したシカゴ市のセツルメントを見直し、彼を中心に社会・大学・セツルメントの関係を見直すことである。すでにズウエブリンやアダムズがプレイグラウンドを重視し、発言も行っていたことは知られているが、改めてその点を軸にして歴史を見ていくことが重要であろう。それによって、シカゴ市で公的なレクリエーションがどのように芽生え、どのような過程を経て都市政策の中に組み込まれていったのかを一つの軸を以て捉えることが出来るだろう。

1. 初期シカゴ学派とズウエブリン

ズウエブリンを研究するに当たっては、初期シカゴ学派としての位置づけが低く、殆どまとまった資料が存在しないながらも、やはりシカゴ学派の理論・学説史に関わった文献・資料、そして近接領域の社会福祉学の研究から彼の位置づけや評価を整理して行く必要があるだろう。

日本におけるズウエブリン

初期シカゴ学派に関わる研究においてズウエブリンの名前が出てくることはほとんどない。



写真1 若き日の Charles Zueblin

*Wukas, Mark, *The Worn Doorstep*, 1991, p.8. より転載。文末註57) を参照されたい。

その第1世代として名前を挙げられるのはアルビオン・W・スモール Albion W. Small, チャールズ・R・ヘンダーソン Charles R. Henderson, ジョージ・E・ヴィンセント George E. Vincent, ウィリアム・I・トマス William I. Thomas であることが通例である。また、ズエブリン Zueblin の日本語表記は難しく、筆者が見たところで「ゼブリン」「ズーブリン」「ズエブリン」「ズェブリン」「ズ布林」「ツ布林」「ズヴリン」と多数存在し、統一されていない。本稿では今後統一されていくことを願い、「ズエブリン」としたい。以下に、社会学・社会福祉学の研究でズエブリンに触れたものについて見てみよう。

中村は、ハル-ハウスとシカゴ学派第1世代の関係を問題とする論文と第1世代と社会問題

に関する2つの論文⁵⁾の中でズエブリン（原文ではゼブリン）について触れている。前者では、ズエブリンがエール大学で牧師資格を習得中にウィリアム・R・ハーパー William R. Harper⁶⁾から強い影響を受け、そしてそのハーパーの指名でシカゴ大学の教員となったこと、またドイツ・ライプツヒ大学に留学していたこと、ノースウェスタン大学セツルメント Northwestern University Settlement を創設したこと、シカゴ大学エクステンション・ディヴィジョン University of Chicago Extension Division⁷⁾（原文では拡張課とされている）を担当していたことなど、恐らくディーガン Deegan に依拠したものと思われるが、日本の研究者としては最も詳細な記述を行っている。また、これも典拠は明らかにされていないが、彼が生活や芸術、都市や社会など広い範囲での改良に目を向けていたこと⁸⁾や大学外の活動として、学校や市政、そして特別公園委員会の委員などを務めていたことに触れ、ズエブリンが都市改善運動の重要人物であったと述べている。また、中村は前者の論文でディーガンの著書を基に、初期シカゴ学派の人物とハル-ハウスの具体的な関係を表した図表の紹介も行っている。しかし後者の論文では、ズエブリンに関する記述は一箇所、彼がハル-ハウスのレジデントであったことを述べているだけである。

秋元も初期シカゴ社会学とハル-ハウスに関する論文⁹⁾の中で、第1世代として有名なスモールとヘンダーソンに加えて、ズエブリン（原文ではズーブリン）の名前を挙げている。更に秋元は、スモールが人道主義的な立場から、そしてヘンダーソンも宗教的な使命感からソーシャル・ワークや改良主義的な活動に熱心であり、彼らが都市の社会問題とその改良とい

うところから離れて存在することができなかった、と述べている。この指摘は大いに興味深いし、ズゥエブリンを考える上でも有用である。また、第1世代が「科学」の確立に熱心でなかったという評価を紹介する中でズゥエブリンを引き合いに出しながら、シカゴ市をフィールドとした社会問題への強い関心と現実への志向性が後の世代の土台を培ったことを指摘している。このこともズゥエブリンの理解を更に進めていく上で重要であろう。第1世代とハル・ハウスの人的交流や研究活動がその後のシカゴ学派の学問的展開にとって極めて重要であり、そのなかでズゥエブリンの重要性について指摘している秋元だが、ズゥエブリン自体については詳しく述べられておらず、社会改良主義者たちとの交わりのなかで社会問題に関わっていったことや、学会誌に掲載したシカゴ市におけるブレイグラウンドに関する論文（1898年）と経済的依存が女性にもたらす影響（1909年）を挙げ、10年ほどの間に市民生活の向上に関わる広い領域で見識を持ち、問題に取り組んでいたことなどを示すに留まっている。

玉井¹⁰⁾は社会情勢的背景とシカゴ学派の関係を整理する中で、19世紀末からの産業化の進行と新しい社会問題の出現、プロテスタント牧師による社会改革運動について触れているところが他の日本の研究者に見られない興味深いところである。そして、「アメリカにおける社会学とは、こうした社会改革に向かった牧師たちによって進められた学問」として初期シカゴ学派、すなわちシカゴ学派の成立について記述している。また、シャタークワ Chautauqua¹¹⁾（玉井はシャートクアと表しているが、他の研究ではシャタクワ、シャトクワ、シャトカー、ショートクワなどこれもまた多様に表記

されている）運動について紹介しているところは興味深い。説明と典拠が十分ではないが、全米に広がりつつあったシャタークワにズゥエブリン（原文ではゼヴリン）、ヘンダーソン、ヴィンセント、アダムズなどが講師として参加していたという指摘をしている。

西崎¹²⁾は、セツルメント・ワーカーについて研究する中で、「社会的福音牧師であり社会改良家であるチャールズ・ズゥエブリン（原文はゼブリン＝筆者）」によってノースウェスタン大学セツルメント（1891年）が開設されたと触れている。ズゥエブリンに対しての言及はそれだけだが、西崎が当時の社会改良事業を担っていたセツルメント・ワーカーに関わって「合理性と実際性を重んじるアメリカ社会の人々は、都市計画、セツルメント、公衆衛生を普及し、また貧困者に対して、精神医学や心理学をベースとしたケースワークを行って社会適応を図ろうとした」と述べるところはズゥエブリンを取り巻く状況を考える上で大変参考になるものだ。

鎌田¹³⁾は、*American Journal of Sociology*¹⁴⁾（以下 *AJS* とする）からシカゴ学派を分析しようとする著作において、アダムズの影響力があった時期の社会学は直接の研究対象ではないとしながらも、ディーガンを捉えて大変興味深い分析を行っている。それは第1世代の社会学へのアプローチに潜在していた、社会改良への志向、政策立案へのコミットメントがパークやバージェスによって隠蔽されたという点である。また、ハル・ハウスでシカゴ・モノグラフに先行する形で統計やケース・スタディを用いた量的・質的な社会調査が行われていたこと、そしてそれらのデータが社会的・政治的な活動資源として使われるべきだと考えられていたことを

述べる箇所は、ズエブリンと特別公園委員会 Special Park Commission¹⁵⁾ の関係を考える上でも大いに参考になる。ここで鎌田は初期 AJS のズエブリンの論文に言及している訳ではないが、スモールを中心に編集されていた頃の AJS が、社会学の方向性をめぐる種々の恣意的な部分を含んでおり、改良主義と関わった政治的な発言の場であったことを読み取ることができる。1908年にズエブリン（原文ではズーブリン）が辞任に追い込まれたことも、第一次大戦後の愛国主義・保守主義の空気につながるものとして「政治的な発言について、大学に基金を提供している財閥企業（vested interests）の不興を買い、辞任に追い込まれてきた」¹⁶⁾ とし、彼を初期シカゴ学派の社会学者たちの中に挙げている。

高橋¹⁷⁾ は、「初期シカゴ学派とフィランソピー」という論考のなかで、ローカル・コミュニティ・リサーチ・コミッティー Local Community Research Committee = LCRC（シカゴ大学の社会科学部門の学際的な研究組織で地域コミュニティ研究を主目的としている）という1920年代以降のシカゴ研究にとって大変重要と思われる組織について紹介している。そして、初期シカゴ学派を再評価しようとする研究として、LCRC と改良運動および多数の改良組織との実質的な結び付き（両者間のデータや根拠の必要性和その提供）に焦点を当てようとしている点で極めて重要で有用な視点を提供していると言えるだろう。高橋は以下のように述べている¹⁸⁾。

地域組織と LCRC との協同を促す要因の一つとして、『科学的データ』の重要性の認識を上げることができるが、その他の要因として、シカゴ大学

関係者と地域組織との密接な関係がある。開学以来、シカゴ大学の理事や教員は、都市基盤の自発的組織に参加し、そのなかで中心的な役割を担うことも多かった。

1920年以前と以後を切り分ける必要を理解した上で、高橋は1890年代から改良運動の中心としてシカゴが発展した理由として、アダムズなどのリーダーシップ、そして多数出現した市民の改良組織を束ねる「改良コミュニティ」の形成が重要と見ている。そして、初期の頃から自発的組織に参加したシカゴ大学関係者の主要な人物の一人としてズエブリンの名前を挙げている（本文ではなく註記において；原文ではズブリン）のである。

ズエブリンは日本だけでなく合衆国においてもシカゴ学派として直接の研究対象からは除外されている。彼を扱う場合は、セツルメントとの関係、シカゴ大学の「宗教者」として、そしてその2つに基づいた第2世代からの低い評価とその後の学問的分離・断絶の中に現れてくる。ジェンダー的な視点からシカゴ学派を研究するディーガンはそういったなかで、ズエブリンについて最も多く論じ、評価している研究者である¹⁹⁾。そのような研究者でも実際 Zueblin と表記するところを Zeublin と「u」と「e」の順序を取り違えて扱っていることは興味深い。ズエブリン本人も誤記を見落としたのか、*Hull-House Maps and Papers* (1895) に掲載されている自身の論文に同じ間違いが見られる。日本で彼をズーブリンと表記している場合、このディーガンあるいはダイナーの論文、あるいはハル・ハウスの著作物に依拠して表記を判断したのではないかと想像する。

ダイナーがズエブリンの経歴について紹介

をする時、『フーズ・フー・イン・アメリカ』*Who's Who in America*（1911年版）を利用して、ディーガンはそのダイナーを引用している。筆者は、ここではより新しいものとして、コリアーズ百科事典 *Collier's New Encyclopedia*（1921）を紹介する²⁰⁾。

ZUEBLIN, CHARLES, an American educator and publicist; born in Pendleton, Ind., in 1866. He was educated at the University of Pennsylvania, Northwestern University, Yale, and the University of Leipzig. In 1891 he founded the Northwestern University Settlement. In 1892 he became the first secretary of the Chicago Society for University Extension. From 1892 to 1895 he was instructor; from 1895 to 1896 assistant professor; from 1896 to 1902 associate professor; and from 1902 to 1908 full professor of sociology at the University of Chicago. In 1911-1912 he was editor of the "20th Century Magazine." He lectured extensively and contributed frequently to philosophical and sociological journals, and to many of the most prominent magazines and reviews. From 1901 to 1902 he was president of the American League for Civic Improvement. He wrote: "American Municipal Progress" (1902); "A Decade of Civic Development" (1905); "The Religion of the Democrat" (1908); "Democracy and the Overman" (1911).

この中で、シカゴ市大学エクステンション協会 the Chicago Society for University Extension²¹⁾の事務局長を務めていた際の所属は、ノースウェスタン大学であるのかシカゴ大学であるのか

などについて確認が必要である。多くは彼が1892年からシカゴ大学社会学部に着任したという記述をしているが、ダイナー Diner²²⁾などは1894年からとしている。また、彼がシカゴ大学を去ったのは1907年かあるいは1908年²³⁾か、ノースウェスタン大学セツルメントの設立年は1891年なのか1892年なのかについても若干の食い違いが見られる。こういった事柄も、ズウェブリンに対する注目や評価が低いこと、当時の歴史的事実が十分に積み上げられていないことを表しているだろう。

藤田²⁴⁾は、「P. ゲデスと都市社会学の展開」のなかで、他には見られない大変斬新なズウェブリン（原文ではズウェブリンあるいはズエブリン）評価を行っている。彼が示す都市社会学の系譜図に簡潔に表されているところであるが、要するにイギリス人パトリック・ゲデス Patrick Geddes の市政社会学・都市計画が、合衆国ではルイス・マンフォード Lewis Mumford に都市文明論・都市計画という形で受け継がれたが、シカゴ大学ではズウェブリンが継承したものが後代のロバート・E・パーク Robert E. Park やアーネスト・W・バージェス Ernest W. Burgess によって抹殺されたために断絶したということである。そしてその後は都市社会学としてのシカゴ学派が強大な力を持つ中で、ゲデスやマンフォードなど他大学の都市研究者の業績が葬られたということを述べている。藤田の主張は、ズウェブリンについて述べるのが主要な問題ではないが、パークやバージェスと同じシカゴ学派に属しながら捨て去られたズウェブリンの位置を重要なものとして扱っている。ズウェブリンが学問的に優れた人材で、シカゴ学派の都市社会学の開祖として高い評価を与えられるべきか否かは別として、改め

て彼の位置づけを検討し直すことにおいて藤田の考えに同意するものである。ズエブリンは市政社会学 municipal sociology²⁴⁾の最初の担当者として考えられるが、レクリエーション研究にどのようなアプローチをするかという問題も含めて、シカゴ学派の“Urban Sociology”形成過程における「社会福祉」「都市計画」に関わる問題が排除されて行ったことに関しては改めてその学問的是非が問われねばならないだろう。このことは、前田征三が「初期シカゴ学派研究への回帰」のなかで述べている「社会学外のような実践的調査（社会改良主義者たちの活動の一環など）と区別するために、対象との連帯よりは自らの調査方法論の洗練と理論枠組みの明確化を意識した結果……（中略）……もっとも初期のシカゴ学派が持っていた実践的志向を薄めることとなった」²⁵⁾ということとも関係していようし、シカゴ・レクリエーション運動史においても重要な意味を持つ。

西欧研究者によるズエブリン評価

クルツ Kurtz は、ズエブリンをシカゴ学派の第1世代に数えながらも、学部との関係や役割、そして在任期間から主要な人物でなかったとしている²⁶⁾。確かに周辺的な存在であったズエブリンだが、彼に対して物事を科学的に理解する情熱を持たず、社会学者ではなかったと断定するダイナーの論拠や妥当性については若干の再検討が必要ではないかと考えている。シカゴ大学が創立された当時の背景や社会学部創設の目的や過程、すなわちシカゴ市の社会問題を解決していこうとする中で社会学が確立期にあり、そのただ中にズエブリンが居たこと、そしてシカゴ学派における研究実践やプラグマティズムを巡って考慮すべき点が現在でも多々

存在することからすれば（ズエブリンが極めて政治的であり客観性から離れつつあったことは確かだが）、ダイナーの主張をそのまま受け取ることはできないだろう。

ダイナーは一方で、ズエブリンが市政の改良や公園、エクステンション教育において主要な人物であったと述べている。また、彼が特別公園委員会のメンバーであること、教育に関与していることなど、大学の外で様々な市民や行政に関わった仕事をしていたことを紹介している²⁷⁾。

ディーガンはズエブリンを最も詳細に取り扱い、多くの資料に基づいて彼を正当に評価している研究者であろう²⁸⁾。彼女は、ズエブリンがライプチヒ大学で行っていた旧約聖書の研究に見切りを付け、政治学や社会科学に転じた旨を1891年、ハーパーに手紙で伝えたことを紹介している。また、その直ぐ後にハル－ハウスのレジデントになったとしている。1892年にはノースウェスタン大学セトルメントを創設し、そして同時期にハーパーによってシカゴ大学エクステンション・ディヴィジョン University of Chicago Extension Division に迎えられたことになっている²⁹⁾。ディーガンの指摘で興味深いのは、ズエブリンがAJSに「世界で最初の社会学的実験室 The World's First Sociological Laboratory」³⁰⁾という論考を寄せていたことに対する以下のようなズエブリン評価である³¹⁾。それは、ズエブリンがセトルメントを「実験室」と位置づけることに関わった一人であるにも関わらず、当時のシカゴ学派がセトルメントを「植民地化」し、実験・観察に利用しようとする動きの中で、彼が「セトルメントも大学も都市や社会進化の一部である」とし、都市、大学、セトルメントを一つのもの

として捉え、ズウエブリン自身はセツルメントを中心とした研究を「社会学者の仕事として」行おうとしていたこと、である。実際、ズウエブリンの研究スタイルは批判されることも多いが、そのような研究活動の成果として *Hull-House Maps and Papers* の「シカゴ・ゲットー The Chicago Ghetto」という論文³²⁾ があるといえるだろう。しかし、ディーガンも指摘しているように³³⁾、この論文が彼の数少ない学問的な著作となっている。当論文では図1で示した、第7ワード、第16ワード、第19ワードのユダヤ系移民についての統計的情報を使っている部分などが評価されているが、使用した「ゲットー」概念が現実を捉えていないという問題点も指摘されている³⁴⁾。

さて、ここで最も注目すべきはズウエブリンがハル-ハウスでアダムズらとセツルメントでの取り組みを深めていったこと、そしてシカゴ市の特定地区の研究からシカゴ市全体のプレイグラウンドの問題、そして全米のレクリエーション運動に活動を広げていったことである。ディーガンは、彼のシカゴ市での仕事から「市政社会学者」と呼ばれるようになったと述べている³⁵⁾。そして、更にディーガンは「ズウエブリンが、ヘンダーソンやベミス Edward W. Bemis, アダムズ, マクドゥウェル Mary E. McDowell, そして他の女性社会学者たち同様に露骨に社会的な文献から排除され、シカゴ学派初期の創設に関わった人材でありながら等閑視されたことは、大変重大な問題として指摘できる」³⁶⁾ としている。

ズウエブリンの担当していた講義の内容は極めて幅広い領域に渡っていたが、そのうちの一つ、「都市」に焦点を当てたものは後のシカゴ学派の研究につながっていったのではないかと

というのがディーガンの見方である³⁷⁾。ズウエブリンの「市政社会学」は人口の動態と環境問題に注目したものであり、彼の授業を取っていた学生が作成した都市の統計と地図が後にバージェスによって採用されたと言われる³⁸⁾。

前後するが、先ほど触れた「世界で最初の社会学的実験室」の前年にズウエブリンは秋元も紹介していた「シカゴにおける市営プレイグラウンド Municipal Playground in Chicago」という論考を *AJS* に寄せている³⁹⁾。この内容については後ほど触れるが、ディーガンは彼が貧困と都市環境美の関係を地図で示しているとしている。また、彼女は、これは「シカゴ・ゲットー」で培った技術が生かされたものだとも述べている。そして、ズウエブリンの都市環境についての関心や考え方が、アダムズや他のハル-ハウスの女性たちに依拠しつつも、1920年代のシカゴ学派の都市生態学に至る寄せ木細工の大きな部分であるというのがディーガンの考え方⁴⁰⁾であり、筆者も同様な考えを持っている。

以下、ディーガンがズウエブリンの研究活動に関して記している箇所的重要と思われるものを見てみよう。ズウエブリンのセツルメントでの活動・研究期間は必ずしも定かでないが、ディーガンの記述⁴¹⁾ を整理すると1889年のハル-ハウス設立以降、1891年までの間にアダムズの影響でレジデントとなり、短期でイギリス・セツルメント・ハウスのトインビー・ホールを訪問し、シカゴに戻った後にノースウェスタン大学セツルメントを設立したことになる。また、ディーガンに依れば、バージェスによるスモール、ズウエブリン、アダムズ、そしてミードに対する偏見は、彼らが「より良い政府」、ソーシャル・ワーク運動、パブリック・ヘルス運動、プレイグラウンド運動、セツルメント運動、ア

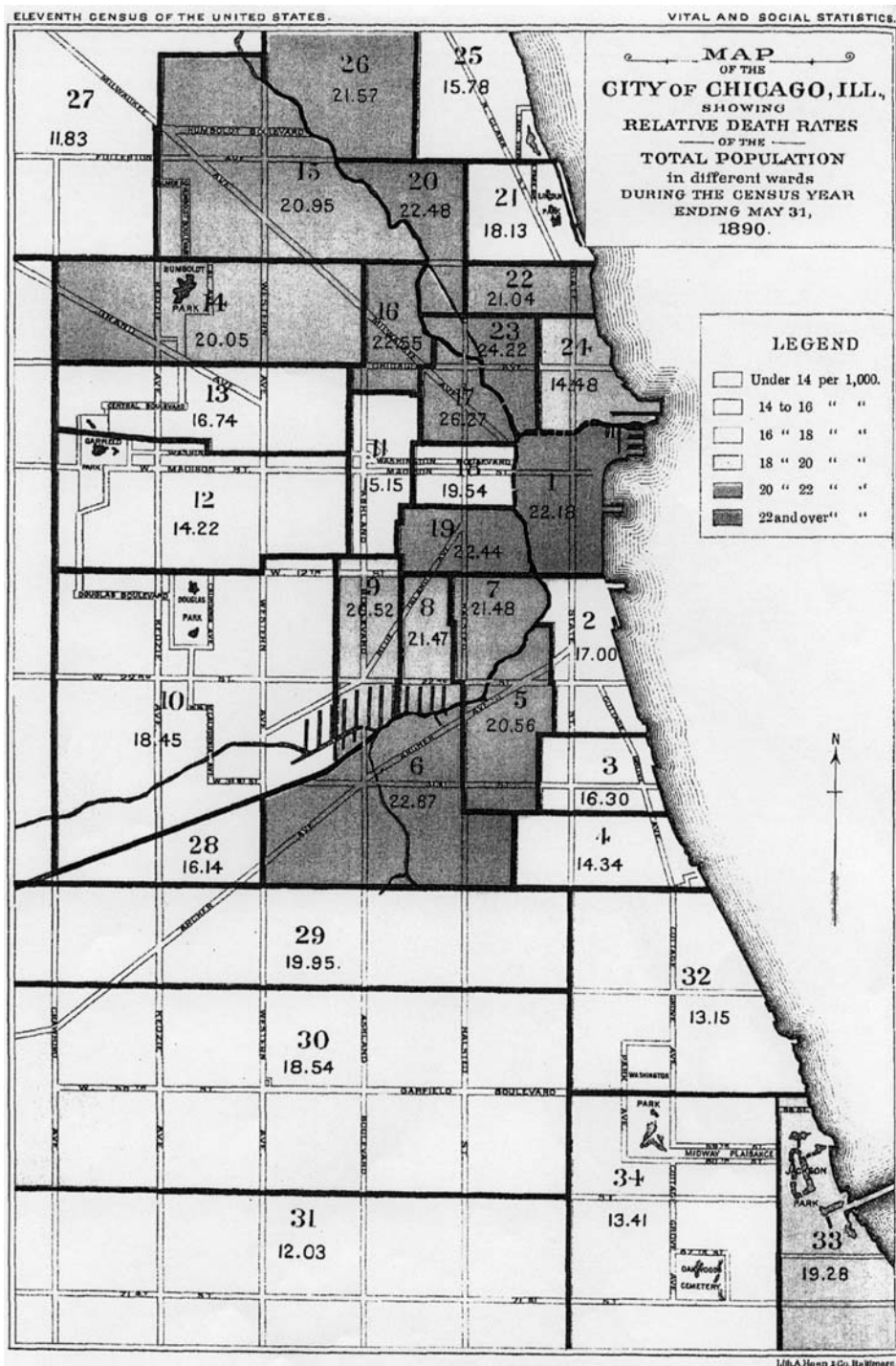


図1 1890年シカゴ市ワード別致死率

*Report on Vital and Social Statistics in the United States at the Eleventh Census: 1890., Part II. —Vital Statistics. Cities of 100,000 Population and Upward., Chicago, Ill., Washington, D.C., 1896. pp.161-181. 中の地図より転載。

メリカナイゼーションなどに関わっているという所にあったとも述べている⁴²⁾。更に、ズウエブリンはしばしば論争的な主題でエクステンション・ディヴィジョンの講義を行い、シカゴ市民の聴講者に社会制度、生活空間としての地域、そして経済生活について考えさせるような取り組みに成功しており、人気のある講師として講演を数多くこなしていたという⁴³⁾。そして、社会を精力的かつ批判的に分析すること、特にビジネスマンを批判するやり方が基となってシカゴ大学の職を迫られることとなったという。そして、1908年から1924年に亡くなるまで、市民に向けて講演を行う自らが「パブリシスト」と呼ぶ活動を続けたという⁴⁴⁾。次に、ズウエブリンの研究活動においての原点であり、彼の社会改良主義を理解するに当たって重要なセトルメントについて詳細を見ておこう。

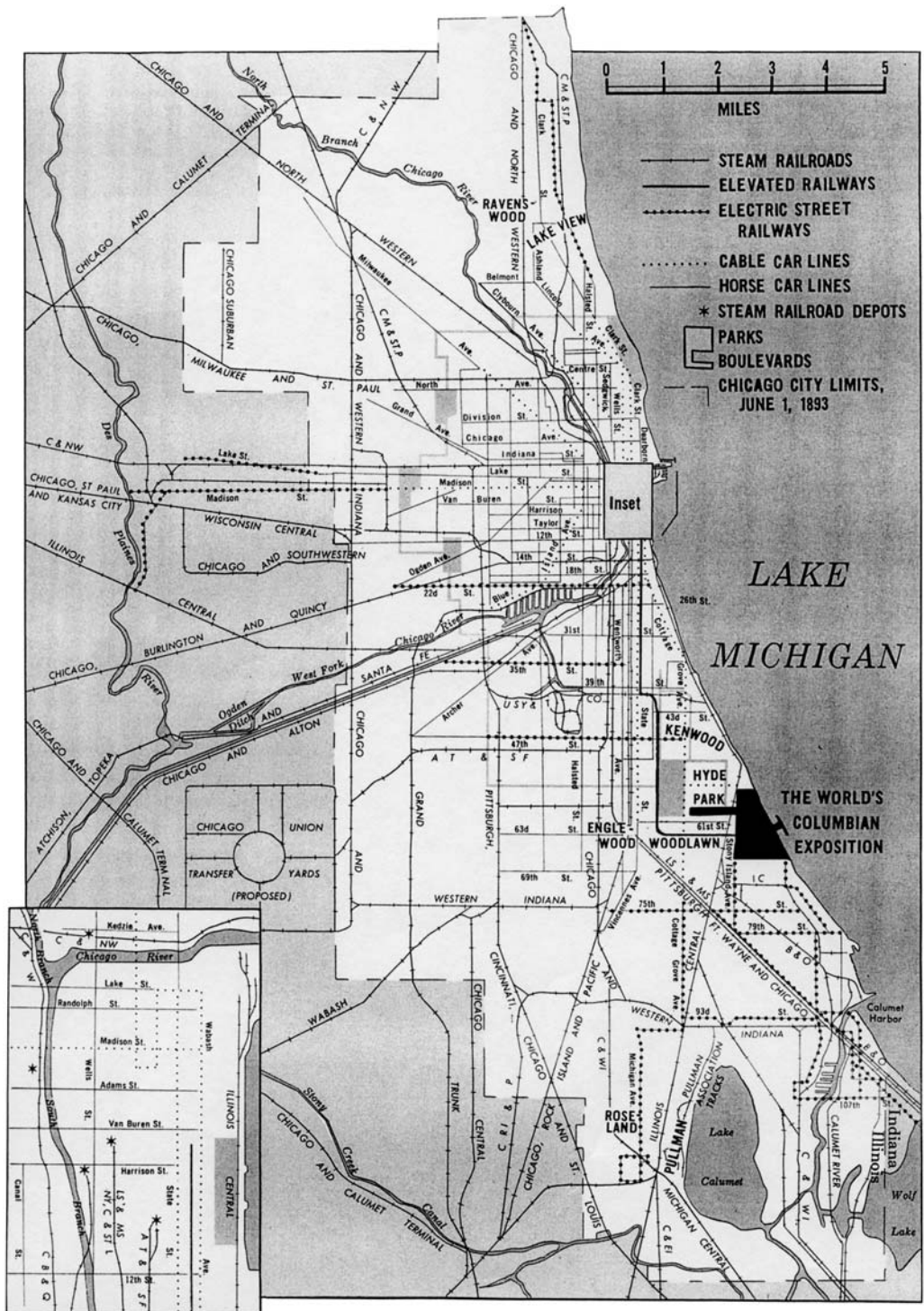
2. セトルメント・ハウスとズウエブリン

セトルメント運動は、合衆国で最も知られているセトルメントであるハル-ハウスが作られてから、1893年の経済不況による大量失業を背景にしながら、シカゴにおける貧困層や移民の生活改善を社会的に実現していく種々の活動の広がりと共に一気に発展したといえる。そして、先にも触れたように運動や取り組みについて初期シカゴ学派との接点や影響などが議論されている。また、社会学のみならず教育やソーシャル・ワークといった領域においても取り上げられることが多い。

しかしながら、これまでセトルメント運動およびセトルメント・ハウスについて拡張しつつあったシカゴ市の都市空間における配置の問題は単に「人口密集地」「貧困地区」といった尺度

によって議論されるのみで、具体的に地図上に落とし、土地取得による施設の拡張や施設の種類の用途について問題とされることはなかった。既に「シカゴ・ゲッター」でズウエブリンが幾つかのワード Ward（＝行政区）で調査を行ったことは見たが、それ以前からズウエブリンが関与したセトルメントは複数存在する。シカゴ学派の中でもっとも多くそして深くセトルメント運動に関わっていたズウエブリンだが、彼の問題意識やフィールドに触れるために具体的な検討を行う必要がある。更にセトルメント・ハウスは、その運動が移民貧困層の生活環境改善や余暇・文化活動の享受に焦点が当てられたり、後に施設が市へ譲渡されたものもあったり、その後の公共レクリエーション施設の設置と関連性を持っていると考えられる。そのような理由からも、ある程度地理的な位置も把握し示していくことが重要である。そして、ズウエブリンが直接的に関与したセトルメント・ハウスは、「ハル-ハウス」「ノースウェスタン大学セトルメント University of Chicago Settlement」のシカゴ市で重要とされる3つであった。

シカゴの都市的な拡張とコミュニティの特性を考える場合、シカゴ川およびその支流を境界として地域がそれぞれの特徴を持った空間として発展してきたことを理解する必要がある。そして人口の密集地は産業と交通との関わりで特に川と鉄道路線に沿って位置するようになっていた（図2）。19世紀後半以降、東ヨーロッパからの労働移民もそういった地域に大量に流入していった。またシカゴのサウスサイドの中でも南部に位置するキャーユメット工業地帯 Calumet Region⁴⁵⁾もキャーユメット川 Calumet River（図2右下）に沿って作られ、人



*Mayer, Harold M. and Wade, Richard C., *Chicago: Growth of a Metropolis*, the University of Chicago Press, 1969, p.137. より転載。

口が密集した地域を形成していた。

劣悪な環境に暮らす人々がよりよい生活を営み、人口密集地に新鮮な空気と開放的な空間をということでセツルメント・ハウスはまさにそういう過酷な条件の土地に作られてきたことはよく知られている。それは一般的にセツルメント運動に共通することであるが、具体的にシカゴではどこに作られてきたのか、先ほども見た図1の1890年第11回センサスを基につくられた地図で見てみよう。致死率の高い場所が濃い色で示してあるが、ほぼシカゴ川およびその支流に沿っていることが見て取れる。ズウエブリンが関与した3つのセツルメント・ハウスはこれらの川沿いに広がる人口が密集した、致死率の高い区域か、そこに近接した地域に作られた。そして、そのうちの2つハル・ハウスとノースウェスタン大学セツルメントは、シカゴ川の西側、ニア・ウェストサイド Near West Side とウェスト・タウン West Town に位置している。因みにノースウェスタン大学はシカゴ市北部の境界、ミシガン湖岸の街、エヴァンストン Evanston に位置している。また、シカゴ大学は先の地図上の第34ワード、ワシントン公園 Washington Park とジャクソン公園 Jackson Park の間、ハイドパーク Hyde Park とウッドローン Woodlawn というコミュニティの境に位置している（1893年当時の図2では、シカゴ万国博覧会 The World's Exposition 会場の西側ということになる）。いずれも人口が密集した劣悪な環境からかなり離れた位置にあった。

以下に、施設と空間的な配置、活動の特性などからズウエブリンや大学との結び付きや関わりについて考えていこう。

ハル・ハウス

ジェーン・アダムズとエレン・ゲイツ・スター Ellen Gates Starr⁴⁶⁾ のハル・ハウスは800 South Halsted Street に1889年9月18日に作られている。ニア・ウェストサイドのほぼ中央で、当時の地図である図1では第19ワードの中でも第18ワードに近く、ループ地区（第1ワード）のシカゴ川を挟んだ西側に位置していた。初期シカゴ学派の中でズウエブリンはレジデントとして、そしてスモールやヘンダーソンも常時訪問していたといわれている。シカゴ大学の社会学部が1892年に創立されてから、相互に強い繋がりを持っていた点が強調されることが多いが、シカゴではハル・ハウスが学者を巻き込んだ市民運動の起点となっていたということができよう。ズウエブリンはシカゴ大学に1892年に着任し、先ほども触れた1895年に出版される *Hull-House Maps and Papers* (1895; 以下 *HHM&P* とする) に「シカゴ・ゲッター」というユダヤ人のコミュニティに関する調査研究を寄稿している。この *HHM&P* の執筆者のなかで、大学で学問的な教育を受けたのはズウエブリンともう一人フローレンス・ケリー Florence Kelley⁴⁷⁾ だけであったが、この二人が研究成果の公表に関わっていたのは、アダムズが評するに「正真正銘のレジデント」であり、同僚として共にコミュニティでの経験を研究活動に生かしてきたからに他ならない⁴⁸⁾。これは、改良のセンターがセツルメントにあったということと同時に、ズウエブリンにとっての中心的な課題がセツルメントでのコミュニティ活動にあったということであろう。

ハル・ハウスの活動としては、ズウエブリンが合流した頃から労働局の統計調査に加わって長時間の不正規労働やスラムに関する研究、そ

して農務省 Department of Agriculture の栄養調査などが行なわれていた⁴⁹⁾。社会改良の活動のためにズエブリンの研究・調査力量は期待されていたといえる。

そして、ハル-ハウスは1893年にシカゴ初の公的なプレイグラウンドをつくっている。これはケリーに依れば同じ第19ワード内の、「スラム土地所有者」のウィリアム・ケントとその父親の所有する、みすばらしい家屋を取り壊してプレイグラウンドとして利用することを認めさせたものであったという⁵⁰⁾。シカゴ市当局はこのプレイグラウンドに管理人を配置したが、ハル-ハウスのレジデントたちは時折子どもたちの指導に携わったり、この場所が正当に利用されるよう調整に入ったりもした⁵¹⁾。

また、1894年にハル-ハウスは1ブロック北側の土地と建物を賃貸料無料で2年間の提供（寄付）を受け、シカゴ市で初めての公共水浴場を開設した⁵²⁾。そして、2年という期間の終わりには、市がこの土地を買い取ることを想定して準備がされていた⁵³⁾。

ハル-ハウスは政治的にも活発に活動し、直接シカゴ市および第19ワードに働きかけ、市民生活の改良に相応しい議員候補者の後押しをするなど、政治的な判断も下していた⁵⁴⁾。また、1898年に消費者連盟 the Consumers' League を組織したり、1903年に女性職能別組合 the Women's Trade Union League 組織の立ち上げをレジデントが支援したりもしていた⁵⁵⁾。

その他、ハル-ハウスの活動は文筆活動も含めてたいへん活発で多岐に渡っており、ズエブリンがどのように関与していたか、その全容はまだ把握しきれていない。しかし、後に更に見ていくようなズエブリンの経歴や活動、すなわちプレイグラウンド運動についての言及、

実業家に対する辛辣な批判、左翼のレッテルを貼られてシカゴ大学を追われること、そしてその後の言論活動を考えれば、当時大学とセツルメント、そしてコミュニティ、シカゴ市を結び付け精力的に研究活動をしていた最も重要な人物であったことが理解できるであろう。

ノースウェスタン大学セツルメント

ノースウェスタン大学はシカゴ市の北部に接するエヴァンストンに1851年に創立されたキリスト教メソジスト派の大学である。そのセツルメント・ハウスとして、つまり大学と繋がりを持ったシカゴで初めての組織として、1891年にノースウェスタン大学セツルメント Northwestern University Settlement は作られた。創立者はズエブリンとクラーク・ティスデル Clark Tisdale 夫妻となっている⁵⁶⁾。設立者の一人としてズエブリンの名前が挙げられているものの、彼はその後一年経たずしてそこを離れている。

創立からズエブリンが離れるまでのまでの経緯は以下のようなものであった⁵⁷⁾。1891年12月、当時ノースウェスタン大学の学長であったヘンリー・ウェイド・ロジャース Henry Wade Rogers 夫妻とズエブリンとそのフィアンセ、オーロラ・フィスク Aurora “Rho” Fisk がディナーに招待されたウィルソン家で、「協会」がつくられた。ウィルソン家ではその一週間前にジェーン・アダムズを招いていた。そのようなこともあって、ディナーの出席者の話しはハル-ハウスに次ぐ第二の「ネイバーフッド・ハウス」の設立、それも大学が関与しながらも直接的な支援なしで運営できるものを構想することに及んだ。そして、このような食事の席での「協会」設立の後、ズエブリンが代表レジデ

ントとして、クラーク・ティスデール（副代表レジデント）夫妻と共に143 West Division Streetの平屋アパートで始められた。しかし、ズウエブリンは翌1892年には全てをティスデールに引き継ぎ、フィスクと結婚し、シカゴ大学で教鞭を執る道を選んでいる。

ズウエブリンは短期間でノースウェスタン大学セトルメントを離れたが、現在でもこの活動は続いている。最初の施設から当時の第16ワードを中心に、3度ほど場所を変えた後に現在の1400 West Augusta Streetを活動の拠点にしている⁵⁸⁾。

この第16ワードのコミュニティは、創設当時から16もの言語が飛び交う極めて民族的多様性を有した地域であり、また、人口密度も極めて高く生活環境も劣悪であった⁵⁹⁾。ズウエブリンらの創始者は、このノースウェスト・サイドをハル-ハウスに次ぐセトルメント・ハウスのロケーションとして選んだ訳であるが、代表者の一人がそのことについて、社会・市民活動を行うに当たってこれ以上その目的や計画に沿った場所はない、という認識を示している。そして、「私たちにとって最も重要な外国人のアメリカナイゼーション、アメリカ人になる過程がゆっくり徐々にだが現実のものとなりつつあり、私たちは日々それに取り組んでいる」とも述べている⁶⁰⁾。スペイン Spain は、この言葉がズウエブリンのものであり、彼が「セトルメントの使命をアメリカ市民になることを手助けするもの」と定義付けている箇所として紹介している⁶¹⁾。

ノースウェスタン大学セトルメントの活動は、劣悪な環境にあった第16ワードの衛生面かなりの労力を割いていたが、レクリエーション関係においてもかなりの活動が行われてい

た。それは1891年当初より始まっており、1899年まで自分たちでプレイグラウンドを維持するような努力を、地域にとって適切なプレイ空間であることを念頭に活動が続けてきたことを意味している。そして、それは主に子どもたちが異常なまでに密集した居住区で不健康な、空気が澁み日光も当たらない所で生活をしてきたからであるという。1897年には、シカゴで2番目の（ハル-ハウスに次ぐ）プレイグラウンドがノースウェスタン大学のセトルメント評議会 the Settlement's Board of Trustees のメンバーであった人の努力によってノースウェスタン大学セトルメントの監督管理の下で運用を開始している。そのプレイグラウンドはフェンスで囲まれた、ブランコ、砂山、屋根付きの建造物がある、ノースウェスタン鉄道 Northwestern Railroad によって貸し出されたものであった⁶²⁾。このプレイグラウンドは現存するが、すでに20世紀初頭から、既にエッカート公園 Eckhart Park としてウェスト公園行政区 West Park District⁶³⁾ によって管理運営されている。

シカゴ大学セトルメント

シカゴ大学セトルメントは、他の二つと違い人口密集地区であるユニオン・ストックヤード Union Stockyard があった第6ワードに近接するバック・オブ・ザ・ヤード Back of the Yards 地区で始められた。行政区では第29ワードに当たるが、当初セトルメント・ハウスが存在した場所は第6ワードよりもむしろ南側の第30ワードに接する辺りであった。この施設は1894年1月にシカゴ大学のクリスチャン・ユニオンのフィランソロピー委員会 the Philanthropic Committee of the Christian Union of the University of Chicago によって設立され、二人

の大学院生のレジデントから始まり、9月にはメアリーE.マクドゥウェルが活動の中で、監督者付きのプレイグラウンドの運営と、近隣のプレイ・センターを確保するために公衆の意見を纏めることを行っていた。また、不正労働から人々を守るために教育的なキャンペーンを張り、労働組合組織を支える活動も行っていた⁶⁴⁾。

シカゴ大学セツルメントと大学、そしてズウエブリンとの関わりは、マクドゥウェルが記したパンフレット『シカゴ大学セツルメント』によって以下のようなことが分かる。まず大学との関係では、セツルメントが大学に対して：理論家と実践者双方にとって解決が求められている現実生活における問題を突きつけること；そして学生にも、そして社会科学にとっても重要な価値をもたらすこと；また、神学部の学生にとっても宗教学の学習や信仰を实践する場を提供すること、が述べられている。そして、大学とセツルメントの公式な関係として、管財人であるレジデントのトップが社会学部のアシスタントに任命されていること、一方で非公式な関わりとして、活動に関心を持った教員が講義を行ってくれていることが記されている。その筆頭にズウエブリンが、そして以下ジョン・デューイ John Dewey 他数名の名前が挙げられている⁶⁵⁾。

ズウエブリンは講義以外ではシカゴ大学セツルメントの役員として名前が挙がっているのみだが、ズウエブリン夫人（“Rho” Fisk）⁶⁶⁾ が活動の主要メンバーであったことが、代表職を始めその他の活動の記録から見て取れる。そして、このズウエブリン夫人の著作から、夫妻でセツルメント活動を通じたレクリエーション運動への取り組みを行っていたことが容易に想

像できる。

3. ズウエブリンの著作と研究活動について

これまでも見てきたように、社会科学を志してライブチヒから戻ったズウエブリンは、ハル-ハウスのアダムズのもとでセツルメント活動を行いながら研究活動を開始した。そして貧困地域の問題を統計的に把握し社会改良に役立てようとしていた。それが「シカゴ・ゲッター」前後までのズウエブリンの姿であろう。

その後、彼は徐々に公開講座の講師としてその雄弁な語り口と、この時期の改革気運および市民意識の高まりによって高い支持を受けるようになった。ズウエブリンとアダムズの関係は信頼で結ばれており、二人の交流は彼が解雇され、シカゴを去った後も生涯続いていたという⁶⁷⁾。ディーガンによれば、シカゴ大学エクステンション・ディヴィジョンの給料が低く、生活の足しにするために多くの講演を請け負っていた⁶⁸⁾ ということだが、筆者の捉えるところでは、そういった講演活動活発化とそこでの人的な活動を通じてレクリエーションに関わる考え方も大きく変化していったと考えている。以下、彼のAJS論文「シカゴにおける市営プレイグラウンド」、『アメリカ都市の進歩』*American Municipal Progress*⁶⁹⁾ および『公的空間発展の10年』*A Decade of Civic Development*⁷⁰⁾ といったとりわけ都市・プレイグラウンド・レクリエーションに関係のある著作と社会的活動の様子からそれを探っていきたいと考える。

AJS 論文「シカゴにおける市営プレイグラウンド」（1898年）

先にも少々触れたが、この論文は「シカゴ・

ゲッター」の手法を受けて執筆された、ズゥエブリンの著作のなかでは数少ない学問的なものの一つである。そして、社会学研究誌に掲載された初めてのレクリエーション関連文献として注目すべきものである。残念ながら当時のシカゴ市に限定された現状分析と提言という内容であるため、一般的な有用性は殆どなく、ズゥエブリンが注目されない中で本論文が取り上げられることはほとんどない。しかし、同じ号にズゥエブリンの論文を細部で補完するようなサディ・アメリカン Sadie American の論考⁷¹⁾と併せて歴史的には重要な意味を持っている。

このズゥエブリン論文の内容はシカゴ市の貧困と地域格差、劣悪な生活環境・人口密集区域を統計的に示し、プレイグラウンドの現況・活動実体に触れ、組織的プレイの特徴と有用性など、プレイグラウンドの設置とそこで行われる活動によってどのような効果・結果がもたらされるのか、そしてプレイグラウンドを増設するには具体的にどうすればよいのかなどについて言及している。図3は、当論文に掲載されている当時のプレイグラウンドの位置を示した地図である。0印が付された位置のソーシャル・セツルメント・プレイグラウンド social settlement playgrounds は、先にズゥエブリンが関与したとして紹介したセツルメントが活動の一環として管理運営していたプレイグラウンドを示している。ズゥエブリンは論文において特定してはいないが、筆者の調査で北（上部）から、ノースウェスタン大学セツルメント・プレイグラウンド、ハル－ハウス・プレイグラウンド、シカゴ大学セツルメント・プレイグラウンドであることが明らかになった。×印で示されている市営プレイグラウンド municipal playgrounds は、主に貧困・人口密集地域に位

置した学校の校庭が、監督者付きのプレイグラウンドとして開放されたものである。歴史家でポーランド移民の研究者であるドミニク・A・パシガ Dominic A. Pacyga もこの川沿いの行政区画が市域の外側につくられた公園・並木道システム park and boulevard system の利用が不可能な公共施設不在の地域であったことをズゥエブリンの論文を引用して述べている⁷²⁾。ズゥエブリンは、シカゴ市の公園・並木道システムが貧困層に恩恵をもたらすものでないが故に近隣の小公園の拡張・増設を訴えていたのである。

この論文の執筆はズゥエブリンにとって一つの大きな転機になったと考えられる。既にセツルメントで活動し、公開された講義を通じて様々な人脈を築いていったと容易に想像できるが、すでに政治的な動きも見せていた。彼は1897年には「市政社会主義 municipal socialism」が争点になったシカゴ市長選で、「市営 municipal ownership」の即時実行を掲げたエドワード・F・デューン Edward F. Dunne 候補の支持に回っている⁷³⁾。こういったズゥエブリンの政治活動は、セツルメントで培った社会改良の思想を体現するものであったといえよう。既にシカゴでは若い事業者のいくらかがビジネス上の理由から公園システムの拡張に関心を示すようになっていた。そして、都市生活の改善・社会改良という気運が高まる中でそういった事業者たちは、都市美に関わる専門家や社会改良に関わるズゥエブリンのような学者・研究者とも合流するようになっていた（ズゥエブリンもまた1898年に組織されたミュニシパル・サイエンス・クラブ Municipal Science Club のメンバーであった⁷⁴⁾）。また、1890年代までにレクリエーションやプレイが子どもの自然な発育・発達に有効であるということが一般にも認められ

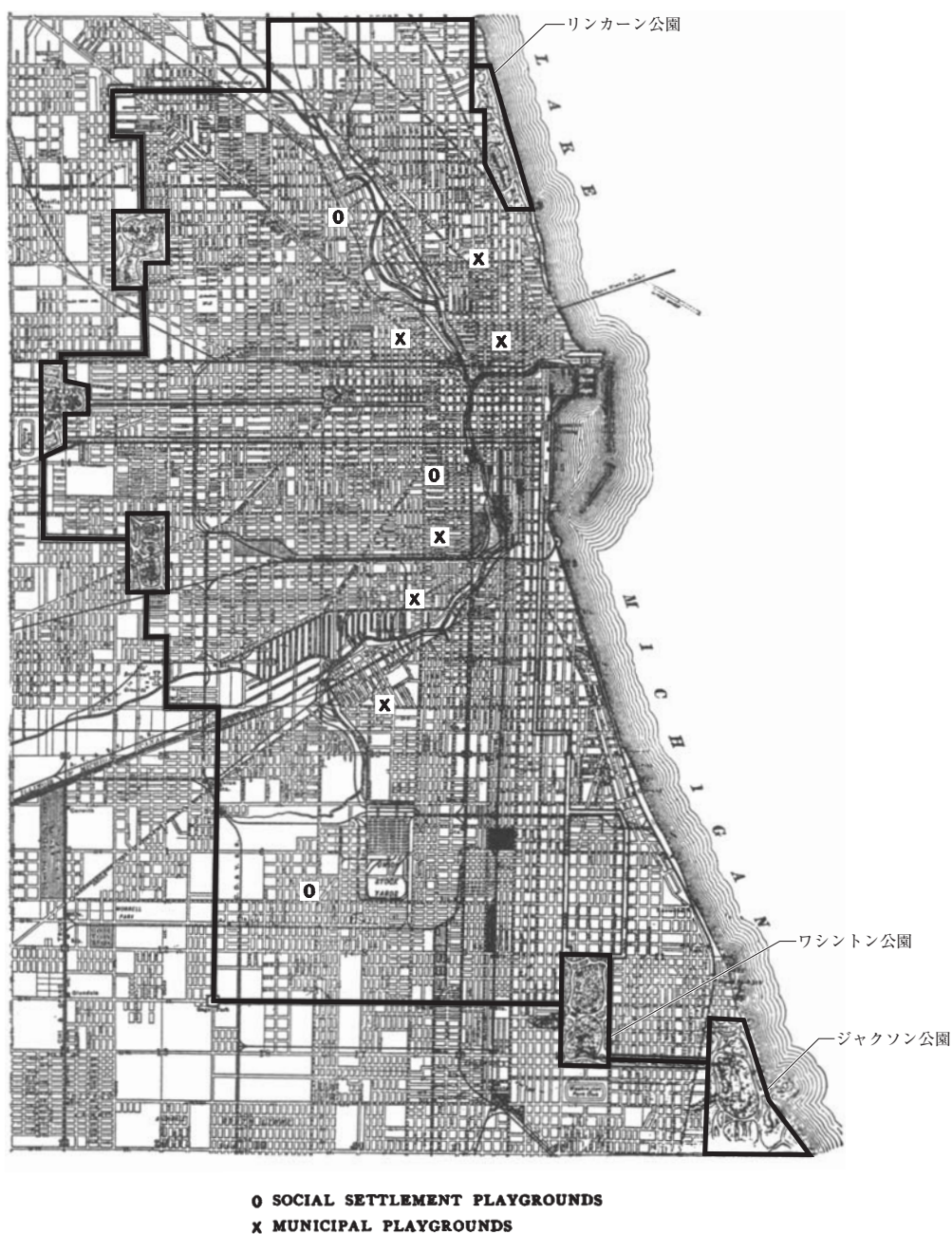


図3 MUNICIPAL PLAYGROUNDS IN CHICAGO

*ズウェブリンのAJS論文「シカゴ市における市営プレイグラウンド」(1898), p.147.で使用された地図に対して、筆者が不鮮明な部分の修正、また公園・並木通および公園名称などの書き込みをして使用している。

ながら、市営のプレイグラウンドを設置することは前例として考えられない状況でもあった。つまり、こういった状況の中でズウェブリンは

レクリエーション運動のキー・パーソンとなったといえよう。彼は、ミュニシパル・サイエンス・クラブがプレイグラウンドとレクリエーシ

ョン施設の具体的な調査結果を基に、シカゴ市に対して問題解決のための委員会立ち上げを要求する旨の議決を行い、それが1899年の秋にウィリアム・ジャクソン William Jackson 市議会議員によってシカゴ市議会に提出されるに至った⁷⁵⁾。そして、その後カーター・ハリソン・ジュニア Carter Harrison Jr. 市長が、シカゴ市における公園の拡張を調査結果に基づいて判断するため、特別公園委員会の設置を決めた時もズゥエブリンと彼の調査が重要な役割を果たしている⁷⁶⁾。

この時期のズゥエブリンは、既に見たようにシカゴ市における特定地域の問題を解決し、改良を提案している。地域格差の問題は図3にも見られるように当時のシカゴ市域を取り巻く公園・並木通システムから恩恵を受けられない人々のために居住区のプレイグラウンドを拡張させていこうとする改良主義の立場であり、決して後に見る都市改良を「総合的都市計画」から考えようとする立場ではなかった。ただし、この時期のズゥエブリンについて考えるべき点としてもう一つ重要と思われるのは（彼だけでなくアダムズなど他のセツルメント・リーダーもそうであるが）、管理されたプレイやチーム・ゲームをアメリカナイゼーションの効果的な媒介物と見ていたところである⁷⁷⁾。つまり、プレイグラウンド増設によって、またそこでのプレイやゲームを通じて民族の融合が図られ、移民問題、貧困と犯罪の問題、ひいては都市問題が解決に向かうという考えを持っていたということである。AJS 論文「シカゴにおける市営プレイグラウンド」では、そういった考えや背景を示すものとして民族性の多様な条件における「市営」という考え方の難しさについて示す結果となっている。カヴァーロ Dominick

Cavallo もそれについて取り上げているが⁷⁸⁾、ズゥエブリンはポーランド人の子どもが組織的な事柄に全く不慣れで、プレイグラウンドに現れても自発的に活動することではなく、チーム・ゲームにおける社会的な事柄やモラルにも全く素養がないとしている。このことをどの様に捉えていくかは後に述べるが、少なくともズゥエブリンの問題意識が現場における具体的改良点に向けられていたことに相違ないだろう。

レクリエーション運動から総合都市計画へ

ズゥエブリンは、コロンビア万国博覧会 The World's Columbian Exposition（通称、シカゴ万国博覧会＝1893年）⁷⁹⁾ の数年前よりシカゴ入りし、シカゴ大学への赴任もシカゴ万国博覧会の前年からである。博覧会開催の前後に、彼がどのようにそれを見て感じていたのかは定かでないが、後にそれを効果的に利用したことが見て取れる。しかし、少なくとも1898年のAJS 論文までの彼は、先にも触れたようにシカゴ川沿いの特定の区域に関心が向いていたことは確かであろう。既に見た図3からも分かるように、シカゴ万国博覧会の会場（ジャクソン公園）から内陸に入り、市の外縁を囲むように北部のリンカーン公園 Lincoln Park まで4つの自然を残した景観公園を並木通で結ぶ形で、富裕層やシカゴ万国博覧会を訪れた観光客が、シカゴ市の美観を貧困・密集地を目の当たりにすることなく楽しめるようになっていた。このシステム作りは1870年代には始まっており、シカゴ万国博覧会の頃にはほぼ完成を見た。改めて述べると、ズゥエブリンはここにアクセスできない中心部に居住する貧困層のために、また居住区域の生活環境改善のために研究し活動していた。

しかし、既に『公共空間発展の10年』（1905

年）までにズエブリンの社会改良主義者としての立場はすっかり変質してしまった。思想的には既にプレイグラウンドにおけるポーランド移民の子どもたちの社会的適応について語る部分にその兆候を見つけることが出来ると筆者は考えているが、実践的には社会改良主義の活動家から「総合都市計画」⁸⁰⁾のアジテーターになってしまっている。

1899年に立ち上げられたシカゴ市の特別公園委員会に、その委員として名前を連ねるようになったズエブリンの位置は、社会改良を実現するために政治家や事業者などと協調しながら目的を追い求める市民活動家の立場から、シカゴ市のレクリエーション行政の政策に関わる立場へと変わっていった。

当時の都市を巡る社会情勢は、「自治体芸術」「村落改良」「野外芸術」などの運動が、均一的な都市社会・生活に向かう過程で、全国各地で多様な様相を呈していた。また、1890年代には、既にニュー・イングランドを越えて中西部にも村落改良運動が広まりつつあり⁸¹⁾、その運動が都市改良運動に転化する時期を迎えつつあったともいえよう。ジョン・A・ピーターソンが「合衆国における都市美の運動の役割を理解するためには、単なる建築指向に関わる歴史的な挿話や都市デザインの問題としてではなく、その運動を“Progressive Era”における都市改良という文脈で、主要には大衆を拠り所とする文化的表現として解釈せねばならない」⁸²⁾と指摘していることを受けて考えるならば、当時の混沌とした社会情勢において大衆運動を先導するリーダーの都市美に関する思想が、その後の都市形成にとって極めて重要であったことが指摘できるであろう。事実、資本主義の発展期に誰の目にも汚れきった産業都市を復活させ、公

共利益を達成する手段は依然として未知、あるいは未確立のものであり、どのようなイメージでそれを実現可能なものに見せるかが既に都市美運動が全国に多様な形で広がった状況での、それらを纏め上げるリーダーに求められることだったと言える。逆に、それぞれの場所で都市美運動に参加していた市民にとっては、公共利益をどの様に実現するかという問題は、ズエブリンのような改革運動のリーダーも含めた市政に関わる人々が示す、市営のプレイグラウンド他、公共サービスを含む都市行政をどのように確立するかといったイメージの提示を待たねばならなかったということになる。提示されるものがたとえ空想的あるいは単なる理想像であっても、都市は局所的な改良から、ある程度の公共利益を念頭に置いた美のイメージを備えた都市の形に向かって計画を立て、それを実行していこうとする方向に導かれることとなったのである。1883年から5年ほどに渡る不況と大量失業などによって都市は荒廃し、建造物も含めた都市の浄化を求める運動が高まった。そのような状況を経て社会改良も大きなうねりを見せた。キリスト教的救済が貧民の生活改善から始まり、大きなリバイバルのうねりとなって都市全体を救済するものへと動き始める、正にそういったことを象徴するような活動をズエブリンは20世紀初頭に展開していくことになる。

このような“Progressive Era”特有ともいえる情勢の中においてもまだ1900年の段階では、都市美運動の目標達成に関わって、総合的な都市計画について提唱する者は出ていなかった⁸³⁾。しかし、1901年にはズエブリンがシカゴの多様な改良組織の協議会を、シカゴ市を改善するための意見交流の場として組織し始め、そして、全国改良連盟協議会 National Improvement

Associations において都市とその生活環境を「美化」することに関心がある組織を統合しようと試み、多様なレベルの組織が結集するようになっていた⁸⁴⁾。まだ、目立った成果や具体的な変化の兆しはなかったが、ズウエブリンは1901年の大会で政治がらみの発言、つまり目標達成には「有能な議員」を必要とするとした発言をするようになっていく⁸⁵⁾。更に彼は「新しい市民の精神」「つつましい責務」「政治浄化の取り組みの理念」といったことを繰り返し述べ、都市美の背景となる考え方を打ち出していた⁸⁶⁾。組織名も設立から2回目のこの大会で、全米公共空間改良連盟 American League for Civic Improvement（以下、ALCI とする）に改称されている。そして、ズウエブリンは1901年から1902年にかけて2代目の会長として⁸⁷⁾、進歩・改革の大きな流れの中心にあって、自らの改良主義の運動を総合的都市計画に質的に変えることになった。そのような流れの中で、1902年のALCI年次大会では会長として、シカゴ万博を始め、ハリスバーグやワシントンの総合計画を公共空間の偉業として称える演説をすることになる⁸⁸⁾。また、彼は運動の連帯を促進し全国的な改良の成果を得るために、他のリベラなリーダーたちがそうであったように改良の専門家の力を借りることを主張し始めた⁸⁹⁾。1903年のALCI年次大会前には、全国各地の都市で市政改良にとって草の根の伝統は重要だが、専門家の質の高い総括的な取り組みと統制がより重要であると述べるようになっていく⁹⁰⁾。

この時期におけるズウエブリンの活動と考え方、およびAJS論文「シカゴにおける市営プレイグラウンド」(1898年)からの変化は、その著書である『アメリカ都市の進歩』(1902年)と『公共空間発展の10年』(1905年)に見ることが

できる。いずれも学術研究書ではなく、まさにリーダーとしてのズウエブリンの考えや活動を広め、運動を象徴的に捉えるためのアジテーションの書であった。前者は、その題名の通り、合衆国の都市とそこでの市営施設・サービスの進歩に関わることを内容としている。因みに序章には市政社会学という副題が付けられている。公的レクリエーションと題した章では、自らがシカゴ市で見聞きし、実際に関わってきたプレイグラウンドや他の施設・サービスに加えて、合衆国都市の10年間の進歩状況を説明しつつそれがヨーロッパに比して立ち遅れていることを指摘し、しかし今後それが進歩していけばアメリカ人の生活がより豊かなものになると暗に示している。そして、重要な点はそれがここ10年の都市生活の拡大という状況によってもたらされていると語っていること⁹¹⁾である。また、公園と並木道と題する章では、AJS論文(1898年)において、川沿いの区域と対比させる形で、公的利益に資していないと捉えられていた公園・並木道システムが、拡張しつつある都市生活との関わりで、自然を残し、都市美を確保することにおいて如何に重要であるのか、全米の諸都市でどのような状況にあり、どこが優れているのかなど、賛美を交えて語るようになっていること⁹²⁾である。

そして後者の『公共空間発展の10年』では、先ほど述べたシカゴ万国博覧会を効果的に利用していることが見て取れる“The White City”に関する章が設けられている。また、具体的にボストン、ニューヨーク、ペンシルベニア州ハリスパーク、ワシントンD.C.などの具体的な都市計画を取り上げる章を設け、それぞれを賞賛する形をつくり、最後に自然への回帰という形で結ぶ構成にしている。重要な点は、ピータ

ーソンも紹介しているが、ダニエル・バーナム Daniel Burnham とともにズウエブリンがアメリカ都市計画の誕生が1893年のシカゴ万国博覧会に始まったと1902年に声明したことである⁹³⁾。その後、それがまとまった形で『公共空間発展の10年』に現れたといえるだろうが、博覧会開催前後のズウエブリンはむしろ総合的な都市計画とは相容れない改良主義に支えられて草の根からの研究活動に身を投じていたはずである。彼はここで「ホワイ・シティ」を、首都ワシントンを除いたアメリカ史上初めての新しい都市作りとして、住民に対する公共施設を備えた統一性を持ったものとしている⁹⁴⁾。そして、史上最も「社会的な」成果だとも言っている⁹⁵⁾。

もう一つ、この著作で注目すべきことは、ズウエブリンが「新しい都市の精神 The New Civic Spirit」として最初の章を起し、市民をどの様に教育していくか、どの様に都市を造るかという形で後半の具体的な総合都市計画に繋がっていることである。第3章 The Making of the City でレクリエーションの問題に関わって以下のように述べている。「公園、プレイグラウンド、そして並木道は今では都市の有機的な部分である。それは言ってみれば呼吸器官のようなものだ」⁹⁶⁾と。

まとめにかえて

小論で、十分にズウエブリンの研究活動に迫ることができたか疑わしい。初期シカゴ学派社会学は、政治的、宗教的な色合いが濃く、客観的な研究とはいえない、いわゆる社会改良主義的な実践活動に傾斜していたといわれる。ジェーン・アダムズのハル・ハウスとの協力・協同

のもと、セツルメント・ハウスを社会への窓として研究実践に取り組み、シカゴ学派社会学の土台形成に貢献したと言われながらも、第1世代のスモールやヘンダーソンなどの主要な人物さえ高い評価は得られていない。ましてやズウエブリンなどは合衆国でも、そして日本でもほとんど光が当てられることはない。このような中で、分散した彼についての記述や資料を収集することは容易ではなかった。しかし、ある程度彼がシカゴ大学を辞任に追い込まれる少し前までの活動を、一つの流れの中で捉えることが出来たのではないかと考えている。一方で、まだ研究を積み上げていかねばならないところがズウエブリンについては数多く残っていることを自覚している。

筆者の直接的な関心はレクリエーション社会史研究にあり、急激な膨張を経験していた都市としてのシカゴと、そこで展開が始まったレクリエーション運動において、どの様な実践的な活動がどの様なリーダーシップの下に行われ、そしてそれが実際の行政政策にどの様に結び付いていたのか、また当時の公的な領域がどの様に創られていったのかという問題意識のもとにズウエブリンを取り扱っている。その点ではズウエブリンの研究活動の流れから、レクリエーションを中心とする公共空間創造過程の一端に触れることができたのではないかと考える。また、ズウエブリンがプレイグラウンドを始めとする組織的なレクリエーションを、移民のアメリカナイゼーションに関連させていた問題についても流れの中にはめ込むことが出来たのではないだろうか。しかし、それが公園行政や都市政策、更には総合都市計画にどの様に引き取られていったのかは極めて大きな問題であり今後の課題としたい。

シカゴでは既に市域を3分割する3大公園行政区が1869年に生まれていた⁹⁷⁾。その30年後には、ズゥエブリンが直接関わって活動し、特別公園委員会にも関与しながら3大行政区主導で市営の小公園システム⁹⁸⁾が確立しつつあった。ズゥエブリンはその後総合都市計画の中にレクリエーションを位置づけ、社会状況としてもそれを支持する機運が高まっていたはずだった。しかし、20世紀初頭のシカゴでは中流層を基盤とするコミュニティで小規模の独立公園行政区が次々と生まれている⁹⁹⁾。この動きを社会情勢との関わりでどの様に解釈するのか、また新たな大変興味深い問題が見出された。最後に、シカゴ学派社会学におけるズゥエブリンの評価およびレクリエーション研究の位置づけについての問題は、その後レクリエーション専門の研究者として在籍したクラレンス・E・レインウォーター Clarence E. Rainwater¹⁰⁰⁾ の評価とともに極めて深い問題となってくるため、更に研究を続けることとしたい。

註

- 1) 拙稿「合衆国における公的レクリエーション運動とその主体—シカゴ市の都市的拡大と市民・行政の多様な実態」有賀・山下編著『現代スポーツ論の射程—歴史・理論・科学—』文理閣、2011年所収の論文を参照されたい。
- 2) この時代は、合衆国では1890年代から1920年代にかけてとされるのが通例である。
- 3) Diner, Steven J. "Department and Discipline: The Department of Sociology at the University of Chicago, 1892-1920." Ken Plummer ed. *The Chicago School Critical Assessments Volume II*, Routledge, 1997, pp.20-61. ダイナーはこの論文においてスモールによる教員採用人事について、当時のシカゴの状況も含めて詳細に述べている。
- 4) ズゥエブリンと同様の「社会学者でない」という低い評価を受けたアダムズは自らシカゴ大学と距離を置いたが、ベミスは、政治的な理由、すなわち1894年のプルマン・ストライキに関与したということでシカゴ大学を解雇されている。
- 5) 中村利昌「ジェーン・アダムス『ハル・ハウス』とシカゴ第一世代」『社会学論叢』日本大学社会学会, No.109, 1990年, pp.74-87および「シカゴ学派第一世代と社会問題」『社会学論叢』日本大学社会学会, No.122, 1995年, pp.1-16を指している。
- 6) ハーパーとズゥエブリンの関係については, Deegan, Mary Jo, *Jane Addams and the men of the Chicago school, 1892-1918.*, p.19およびDiner 前掲論文, p.30参照。
- 7) この University of Chicago Extension Division とズゥエブリンの講義内容などについて研究されたものは見当たらない。筆者の調べでは, *University Extension. Records, [Box, Folder], Special Collections Research Center, University of Chicago Library* に当たることが必要である。概要的なこととしてこの Extension Division 長の下に6つの department が置かれており, それぞれの事務局長が管理運営を行っていたことが分かっている。その中の一つに, 大学のキャンパスと同じような内容の講義をキャンパス外で市民に対して提供する the Class-Study Department があるが, 恐らくズゥエブリンはこの事務局長だったのではないだろうか。*Who's Who in America* に "sec. Class study div., Univ. Extension Dept., Univ. of Chicago, 1892" という記述がある。(Leonard, John W. ed. *Who's Who in America A biographical dictionary of notable living men and women of the United States, 1901-1902.*, A.N. Marquis & Company, 1901, p.1278.
- 8) Deegan 前掲書, p.91. および Diner 前掲論文, p.31. に中村と同様の内容が記されている。
- 9) 秋元律郎「初期シカゴ学派社会学とハル・ハウス」, 大妻女子大学人間関係学部紀要『人間関係学研究』, 2, 2001年3月, pp.291-302.
- 10) 玉井真理子「シカゴ学派の盛衰—社会情勢的

- 背景との関連からみた初期シカゴ学派の成立から衰退まで―』『大阪大学教育学年報』第6号, 2001年, pp.53-62.
- 11) シャタークウェアについては、矢澤修次郎がその著書『現代アメリカ社会学史研究』東京大学出版会, 1984年, p.156. で簡潔に説明しているので参考にされたい。
 - 12) 西崎緑「セツルメント・ワーカーと優生学ワーカー」『福岡教育大学紀要』第55号, 2006年, pp.97-107.
 - 13) 鎌田大資「AJS から見たシカゴ学派の社会学者―人生の舞台としての一九二〇年代の学術誌―」, 宝月・中野編『シカゴ社会学の研究―初期モノグラフを読む―』恒星社恒星閣, 1997年, pp.65-94. また、ディーガンを捉えた箇所は pp.70-1. を参照。
 - 14) 「AJS は、1895年にシカゴ大学のスタッフを中心に創刊され、シカゴの編集陣により運営された。……（中略）……1920年代まではアメリカ唯一の社会学の学術誌だった。」（鎌田上記論文, p.65.）
 - 15) 1899年に設立された、シカゴ市長によって指名された委員から構成された、公園の増設や拡張について審議・諮問する委員会。
 - 16) 鎌田前掲論文, p.77.
 - 17) 高橋早苗「初期シカゴ学派とフィランソロピー」, 宝月・吉原編『初期シカゴ学派の世界―思想・モノグラフ・社会的背景―』恒星社恒星閣, 2004年, pp.225-243.
 - 18) 高橋, 同上書, p.237.
 - 19) ディーガンは、アダムズだけでなく、ジョージ・ハーバート・ミード George Herbert Mead やトマスについても社会改良との関係を問う研究をしており、初期シカゴ学派の研究者を再評価しようとする上で重要な成果を残していると言えるだろう。
 - 20) *Collier's New Encyclopedia: A loose-leaf and self-revising reference work Volume 10*, P.F. Collier & Son Company, 1921, p.504.
 - 21) ズウェブリンは、1892年2月付けで『大学エクステンション・ハンドブック』に原稿を投稿しているが、そこに所属が明らかになるような肩書きは見られない。“The Chicago Society for University Extension” (written in February 1892), George Francis James ed., *Handbook of University Extension*, American Society for the Extension of University Teaching, Philadelphia, 1893, 2nd edition, pp.273-5. また、ズウェブリンは『新社会改良事典』において University Extension の項目を執筆するなかでシカゴ市大学エクステンション協会が1891年に誕生したことを示している。Bliss and Binder eds., *The New Encyclopedia of Social Reform*. Funk & Wagnalls Company, 1910, p.1253 参照。
 - 22) Diner 前掲論文, p.30. *Who's Who in America* (1901年版) にもそういった記述は見られない。
 - 23) Bulmer, Martin, *The Chicago School of Sociology: Institutionalization, Diversity, and the Rise of Sociological Research.*, The University of Chicago Press, 1984, p35. では1907年となっている。
 - 24) 藤田弘夫「P. ゲデスと都市社会学の展開」慶應義塾大学『哲學』第114集, 2005年, pp.1-28. また、ゲデスとマンフォードについては、小論では主要人物ではないため藤田論文を参照されたい。
 - 25) 前田征三「初期シカゴ学派研究への回帰」(2007年度特別研究員研修報告), 『立正大学文学部論叢』128, 2009年, p.80.
 - 26) Kurtz, Lester R., *Evaluating Chicago Sociology*. The University of Chicago Press, 1984, p.2. クルツは、ダイナーが最も学部の歴史については詳しいとしながら、ズウェブリンが主要人物でなかったことを文末註において述べている。
 - 27) Diner 前掲論文, p.31.
 - 28) ディーガンは、ダイナーから初期シカゴ学派に関わる多くの事実を引用・共有しながらも、宗教と社会改革、社会实践と学問の関係に対する考え方の違いからか、第1世代についての評価が相当に違うと考えられる。
 - 29) Deegan 前掲書, p.19.
 - 30) Zueblin, Charles “The World's First Sociological Laboratory”, *AJS*, Vol. 4, No. 5

- (Mar., 1899), pp.577-592. (日本語としては、高岡文章訳の「世界で最初の社会学的実験室」、慶應義塾大学『社会学研究科紀要』第55号、2002年、pp.95-102、がある。)
- 31) Deegan 前掲書, p.35-6.
 - 32) Zueblin, Charles “The Chicago Ghetto”, Residents of Hull-House, *Hull-House Maps and Papers*, 1895, Thomas Y. Crowell & Co., pp.91-111.
 - 33) Deegan 前掲書, p.91. また、同書, p.59. ではこの論文がルイス・ワース Louis Wirth に大きな影響を与え、ゲッターに関する執筆のモデルとなったという。
 - 34) Rima Lunin Schultz “Introduction”, Residents of Hull-House, *Hull-House Maps and Papers*, 2007, University of Illinois Press, p.19.
 - 35) Deegan 前掲書, p.90. また、Bulmer 前掲書では、ブウエブリンの関心が市政改革 municipal reform にあったとしている。
 - 36) 同上書, p.90.
 - 37) 同上書, pp.90-1.
 - 38) 同上書, p.91.
 - 39) Zueblin, Charles “Municipal Playgrounds in Chicago”, *AJS*, Vol. 4, No. 2, (Sep., 1898), pp.145-158.
 - 40) Deegan 前掲書, p.91.
 - 41) 同上書, p.19.
 - 42) 同上書, p.147.
 - 43) 同上書, p.19, p.90.
 - 44) 同上書, p.19.
 - 45) キャユメット工業地帯は、1880年代からの重工業の発展以来、キャユメット湖とキャユメット川周辺の地域が産業構造の変化や盛衰によって境界を変えながら存在している。市民にはシカゴ市域として意識されている地域だが、1957年以降は、79番通り以南で、東側のインディアナ州まで含めて定義されるようになっている。Grossman, Keating, and Reiff eds., *The Encyclopedia of Chicago*, The University of Chicago Press, 2004, p.117.
 - 46) ジェーン・アダムズのハル-ハウスというイメージが強く、またそのように表現されることが多く、実際に彼女のリーダーシップが強大であったことに変わりはないが、創立はエレン・ゲイツ・スターと二人、多くの友人に支えられての事だったという。また、スターは芸術に秀でており、ハル-ハウスでは芸術教育を中心とした活動を担い、サークル活動を広げていた。
 - 47) 社会改良家としてだけでなく、フリードリッヒ・エンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』の翻訳者としても有名で、ケリー版の翻訳は現在でも使われている。研究力量はブウエブリンより上であったと考えられる。
 - 48) Residents of Hull-House (2007) 前掲書, Rima Lunin Schultz “Introduction”, pp.4-5.
 - 49) Woods and Kennedy eds., *Handbook of Settlements*, Press of WM. F. Fell Co., 1911, p.54.
 - 50) Wade Louise C. “The Heritage from Chicago’s Early Settlement Houses”, *Journal of the Illinois Historical Society* (1908-1984), Vol. 60, No. 4 (Winter, 1967), p.423. および McCarthy, Michael P., “Politics and the Parks: Chicago Businessmen and the Recreation Movement”, *Journal of the Illinois State Historical Society* (1908-1984), Vol. 65, No. 2 (Summer, 1972), p.160.
 - 51) Woods and Kennedy eds., 前掲書, p.55.
 - 52) 同上書, p.55.
 - 53) 同上書, p.55.
 - 54) 同上書, p.56.
 - 55) 同上書, p.57.
 - 56) 同上書, p.66.
 - 57) Wukas, Mark (Overboe and Manderschied eds.) *The Worn Doorstep: Informal history of Northwestern University Settlement Association, 1891-1991.*, Northwestern University, 1991., pp.7-8.
 - 58) Woods and Kennedy eds., 前掲書, p.66.
 - 59) 同上書, p.66.
 - 60) 同上書, p.66.
 - 61) Spain, Daphne, *How Women Saved the City*, University of Minnesota Press, 2001, p.231.
 - 62) Woods and Kennedy eds., 前掲書, pp.66-7.

- および Wukas, Mark 前掲書, pp.13-14. また、図 2 を見ると、Chicago and Northwestern Railroad は、ちょうど大学のあるエヴァンストンからノースウェスタン大学セツルメントのある辺りを通り、ループまで繋がった南北に走る鉄道であることが分かる。
- 63) ウェスト公園行政区は、サウス公園行政区、リンカーン公園行政区と同じ 3 大公園行政区の一つである。
- 64) Woods and Kennedy eds., 前掲書, p.70.
- 65) McDowell, Mary E., *The University of Chicago Settlement*, pamphlet, 1901, p.24.
- 66) Rho Fisk Zueblin はまた、“Playground Movement in Chicago” というタイトルの論考を、*The Playground*, Playground Association of America, No. 4 (July), 1907, pp.3-5, 11-13 に寄せている。
- 67) Deegan 前掲書, p.92.
- 68) Deegan 前掲書, p.19.
- 69) Zueblin, Charles, *American Municipal Progress: Chapters in Municipal Sociology*, The Macmillan Company, 1902.
- 70) Zueblin, Charles, *A Decade of Civic Development.*, The University of Chicago Press, 1905.
- 71) American, Sadie “The Movement for Small Playgrounds”, *AJS*, Vol. 4, No. 2 (Sep., 1898), pp.159-170.
- 72) Pacyga, Dominic A., *Chicago: A Biography*, 2009, the University of Chicago Press, p.167.
- 73) Davis, Allen F., *Spearheads for Reform: The Social Settlements and the Progressive Movement 1890-1914.*, Oxford University Press, 1967, p.192.
- 74) McCarthy 前掲論文, p.160.
- 75) 同上論文, p.161.
- 76) Bachin, Robin F, *Building the South Side: Urban Space and Civic Culture in Chicago 1890-1919.*, the University of Chicago Press, 2004, p.140.
- 77) Cavallo, Dominick, *Muscles and Morals: Organized Playgrounds and the Urban Reform, 1880-1920.*, p.29.
- 78) 同上書, p.30.
- 79) 拙稿「シカゴ市公園研究の問題と視角」『立命館産業社会論集』第43巻第4号, 2008年, p.58 を参照されたい。
- 80) ピーターソンが使用した comprehensive city planning に当てる訳語として兼田が選んだものである。Peterson, Jon A., *The Birth of City Planning in the United States, 1840-1917.*, The Johns Hopkins University Press, 2003.
- 81) ピーターソン, ジョン A.『アメリカ都市計画の誕生』鹿島出版会, 2011年, p.137. Peterson 前掲書の訳書であるが, 13, 14, 15章および文末註は省略されている。
- 82) Peterson 前掲書, p.98.
- 83) 同上書, p.138.
- 84) Turnbull, Craig, *An American Urban Residential Landscape, 1890-1920: Chicago in the progressive era.*, Cambria Press, 2009, p.17.
- 85) 同上書, p.111.
- 86) ピーターソン前掲書, p.140.
- 87) Turnbull 前掲書, p.49.
- 88) ピーターソン前掲書, p.176-7.
- 89) Turnbull 前掲書, p.49.
- 90) 同上書, p.49.
- 91) Zueblin (1902) 前掲書, p.276.
- 92) 同上書, p.241-275.
- 93) ピーターソン前掲書, p.164.
- 94) Zueblin (1905) 前掲書, p.69.
- 95) 同上書, p.62.
- 96) 同上書, p.55.
- 97) Halsey, Elizabeth, *The Development of Public Recreation in Metropolitan Chicago*, The University of Chicago Press., 1940 に詳しい。
- 98) 特に、サウス公園行政区のシステムが全米でも評価される画期的なものとなった。
- 99) 拙稿前掲書 (2011年) を参照されたい。
- 100) シカゴ大学社会学部の第 1 世代に分類されるレクリエーション研究者。*The Play Movement in the United States: A Study of Community Recreation*, the University of Chicago Press, 1922. の著者。

Charles Zueblin and the Seedtime of the Chicago Recreational Movement : From social reform to comprehensive city planning

KAWAGUCHI Shinichi *

Abstract: This study is on the subject of the seedtime of the Chicago Recreational Movement. Not enough study has been carried out to explain how public space was established in the 1890s United States “Progressive Era,” especially in the city of Chicago where the background to the popular movement and the process decision were extremely complicated. Thus, to draw a picture of the early days of the Chicago Recreational Movement, this study focused on the ideas and the activities of Charles Zueblin, who was the central person in the social reform movement and specialized on the study of playgrounds in Chicago. Firstly, since Zueblin is not treated as the central figure of the Chicago School of Sociology and has not been studied thoroughly, his evaluation in Japan and the United States is reviewed and reevaluated. Secondly, social settlements connected with Zueblin (Hull-House, The Northwestern University Settlement, and the University of Chicago Settlement) are analyzed in terms of social reform activities and their relationship to the recreational movement including their geographical and spatial locations. Thirdly, Zueblin’s article and books: *AJS* article “Municipal Playground in Chicago”(1898); *American Municipal Progress* (1902); and *A Decade of Civic Development* (1905) are reviewed and analyzed. Finally, this study successfully (but not completely) draws the picture of Zueblin’s thoughts and activities in a stream until his resignation from the University of Chicago. Overall, this study explains a part of the process of making public space an arena for recreation through Zueblin’s research and social activities and their reevaluation.

Keywords: Zueblin, recreation, Settlement, Chicago School of Sociology (early days of), social reform, comprehensive city planning

* Associate Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University